

青い鳥ブッポウソウの生態調査と保護活動を通じて 環境教育の推進と 未来の地域を支える人材育成



実施担当者
岡山県立高梁城南高等学校
指導教諭 光石正和

1 はじめに

ブッポウソウ（野鳥）は、絶滅危惧ⅠB類（EN）に選定される貴重な夏鳥である。高梁野鳥の会が1990年頃から巣箱を用いた地道な保護活動を継続した結果、現在では100羽以上が高梁市宇治地区に飛来し、繁殖を行っている。しかしながら、高梁市内におけるブッポウソウの知名度は依然として低く、地域の子どもたちの観察経験者はごく一部に留まっている。本プロジェクトは、生徒が地域の自然環境に目を向け、希少種の生態調査および保護活動を行うことを通して、自然を尊重する意識、興味・関心、そして課題解決型思考力を高めることを目的とする。この実践報告は、地域資源を活用した環境教育が、生徒の探究心と地域貢献意識にいかなる効果をもたらしたかを検証するものである。

2. 研究概要と活動主体

2.1. 活動の主体と目的

本活動は、ブッポウソウを核として「自然と人、地域と人をつなぐ」ことを目的に、森林科学の授業と有志の生徒チームによって活動した。ブッポウソウは4月末から5月はじめに東南アジアのカリマンタン島から高梁市に飛来し繁殖行動を経て、8月末から9月初旬に再びカリマンタン島へ渡去する。生徒チームは、この限られた飛来期間に合わせて調査支援や広報活動を実施した。今年度の目標は、ブッポウソウの生態を理解すること、そして地域の小・中学校、野鳥の会といった多様な関係者と協力し、地域を巻き込んだ新たな保護活動の仕組みを構築することにある。

3. 実践内容と経過報告

3.1. 専門家による知識習得

活動は5月から実施した。高梁野鳥の会より黒田聖子氏を講師として招聘し、ブッポウソウの生態と保護活動の重要性に関する講義を実施した。生徒は、講師への依頼文作成や当日の司会進行などを自ら担当した。専門家との協働を通して、生徒は自然保護活動の現場における努力と責任の重さを実感した。

3.2. 現場での生態調査と観察

6 月には、高梁市野鳥の会と協力して標識調査と行動観察を実施した。この調査には高梁中学校の生徒も参加し、ブッポウソウの飛行経路や生息範囲を把握する調査補助を担当した。さらに、巣箱に設置したカメラのモニター映像を活用し、雌雄の抱卵や給餌行動の違いの比較を行った。現場での活動を通じて、生徒は観察データを客観的かつ科学的に捉えることの重要性を認識した。



写真1 ブッポウソウの調査① 写真2 ブッポウソウの調査② 写真3 モニターでの観察

3.3. 地域連携による観察会と広報

7 月には、巣箱が設置されている高梁市立宇治高校の校舎を会場に、市内の小学生を招いた観察会と情報交流会を実施した。生徒が、企画から運営までを主導しブッポウソウの行動を観察しながら、その生態や特徴を子どもたちに解説した。参加した児童からは前向きな意見が得られ、本活動の地域連携に寄与していることが示された。



写真4 合同観察会 写真5 野鳥の説明 写真6 雛鳥の様子① 写真7 雛鳥の様子②

4. 広報活動の展開と評価

ブッポウソウが高梁市に飛来しない時期(8月末～翌4月)における継続的な広報活動の展開は、地域の認知度向上を図る上で重要な課題である。文化祭において、これまでの活動成果を紹介、レポートの展示をし来場した地域住民や校外の参加者を対象に意識調査を行った。(有効回答数 36 件)

調査の結果、来場者のうちブッポウソウを「初めて知った」が 61.1%、「絶滅危惧種だと知っていた」が 16.7%となり認知度の低さが確認された。展示後には、ブッポウソウについての理解が「とても深まった」「少し深まった」が 97.2%に達し、保護活動への興味についても「とても持った」「少し持った」が 97.0%となった。この結果から、生徒による主体的な展示活動がブッポウソウが不在の時期においても、地域の認知度向上と環境保護への関心を喚起する上で極めて有効であることが示された。

5. 教育的効果の考察

本プロジェクトの教育的効果を検証するため、参加した生徒を対象に、8項目からなる意識調査(5段階評価)を実施した

【5段階評価】

5：非常にそう思う 4：ややそう思う 3：どちらでもない 2：あまりそう思わない
1：全くそう思わない

表1 ブッポウソウ保護活動による生徒の変容評価 (5段階評価の平均値)

質 問 項 目	評価
地域環境への関心が高まったか	4.5
絶滅危惧種の知識・認識が深まったか	4.5
科学的に物事を捉えることの重要性を感じたか	3.0
課題解決に向けた探究心が養われたか	3.6
チームや地域の方との協力に楽しさや意義を感じたか	4.2
他者との意見交換を通じてコミュニケーション能力が向上したか	4.0
地域の自然保護に貢献していると感じるか	5.0
今後も自然保護活動に関わりたと思うか	4.6

地域貢献の実感(5.0)が満点であり、活動への継続意向(4.6)も高い数値がでている。これは、絶滅危惧種の保護という地域に根ざした活動が、生徒の社会参加意識と強い達成感を与える点で非常に有効であったと考える。協働の楽しさ(4.2)やコミュニケーション能力(4.0)も一定水準にある。一方、科学的思考力(3.0)、探究心(3.6)となっている。この結果は、「地域に貢献したい」という高い意識とは裏腹に、その活動を通じて「科学的な知識や思考力が身についた」という実感が得られていないことを示している。これは、観察データの収集や分析といった探究プロセスが、単なる作業に終始し生徒自身による深い考察や議論に繋がらなかった考察する。



上の写真はコンテストに参加した写真である。生徒はブッポウソウの保護を軸とした具体的な活動内容について、自らの言葉で発表を行った。この発表に向けた準備、および当日の登壇という一連のプロセスを通じて、生徒は地域環境の現状を深く理解した。その結果、ブッポウソウという象徴的な存在を介して、受け身ではない、自主的かつ積極的な環境保全活動を自らの意思で実施・継続する能力を身に付けるに至った。

こうした経験は、単なる知識の習得に留まらず、地球規模の課題を自分事として捉え、行動に移す姿勢を養うものである。本活動を通じて、将来の環境を主体的に守り、持続可能な社会を力強く担っていく次世代の人材育成を実現することができた。

6. まとめ

本年度のブッポウソウ保護活動は、生徒が希少野生動物の保護という具体的な課題に直面することで、環境保全に対する当事者意識や地域貢献への意欲を劇的に向上させるなど、多大な教育的成果を収めた。しかしながら、活動を通じて得られたデータの分析や、仮説検証に基づいた論理的な考察といったの面においては、科学的思考力および探究心の育成という中核的な課題を残す結果となった。生徒は活動の意義を感性としては深く理解したものの、エビデンスに基づき結論を導き出す研究サイクルを確立するまでには至っていない。

これらの教育的課題を真摯に受け止め、次年度はフィールドワークでの気づきを科学的な問いへと発展させる指導体制を強化する方針である。具体的には、ICT を活用したデータ集計の導入や専門家との対話を通じ、生徒一人ひとりが「問い・仮説・検証・考察」のプロセスを自覚的に実践できる仕組みを構築し、研究の質をさらなる高みへと引き上げていきたい。

謝 辞

本プロジェクトの遂行にあたり、活動の基盤を支えてくださった公益財団法人中谷財団様、専門的な知見から多大なるご指導を賜りました高梁野鳥の会の皆様、そして地域での連携にご尽力いただきました高梁市立川面小学校、高梁市立高梁中学校、高梁市立宇治高等学校の関係者の皆様に心より感謝申し上げます。